地域の現況・課題

ISOP は宮城県石巻市内の牡鹿半島東岸を活動範囲にしている。牡鹿半島の沿岸部はリアス式海岸を呈す。また、その入り組んだ浦々ごとに漁業集落が形成されている。

当地ではウニ・アワビが貴重な磯根資源となっているが、そのエサとなる藻場が、近年の環境変動の影響などにより衰退し、その回復が望まれている。

連携の経緯

上記課題の中、三陸地域で潜水業を営む調査会社や漁業者等の多様な主体が連携した組織「I.S.O.P.（略称）」が令和 2 年度に設立された。その経緯は、以下のとおりである。

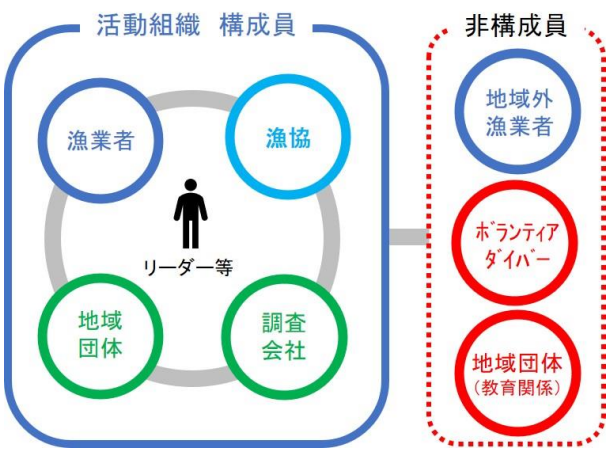
当組織の一員である調査会社は、地元三陸・石巻に根付いた調査業務を得意とする潜水業者であり当会社が地先の藻場調査をしていたところから漁協との関係性が始まった。

磯焼けを懸念する声が一部の地元漁業者で顕在化し、調査会社は本事業を活用した藻場保全活動を推薦した。また、調査などを通じて調査会社と面識のあった市役所担当者（水産庁からの出向）や地元団体も同様の推薦をし、協業することとなった。

協業にあたっては、多くの漁業者が外部者による現状変更に抵抗感を示した。そこで、調査会社がボランティアで潜水調査を実施し、水中写真などで磯の現状をみせ、藻場保全の必要性を丁寧に説明することで、活動への理解を深めた。

連携体制づくり

連携体制の構築にあたっては、調査会社が核となり、後述する組織外の外部協力者も誘引しながら活動の技術統括を実施している。



取組主体であるダイバー漁業者は、当該地区の若手有志で構成されている。いずれも主体性・意欲が高く、「潜水士資格を取得してきたから活動に参加させてほしい」と自ら志願してきたものもいる。また、地元外の漁業者も参加しており、「技術を教えてほしい、地元に落とし込みたい」と志願した。

地域団体は石巻地域を活動の中心とする漁業者集団であり、HP 構築などの広報活動を担当しつつ、地元の教育関係機関と連携して教育活動を実施している。

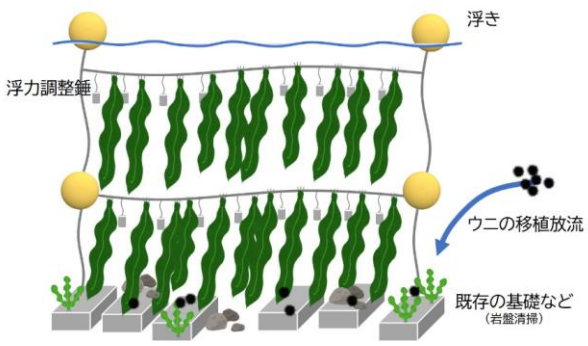
主体	各主体の役割
漁業者	取組主体（潜水）。若手の有志が主体
漁協	全体管理、事務、窓口。
調査会社	技術総括、モニタリング。
地域団体	広報、教育活動。
地域外漁業者	技術を習得して地元に持ち帰りたい意向。
ボランティアダイバー	当該活動に興味があるものを調査会社が誘引。
地域団体（構成員外）	活動組織に教育活動を依頼。

連携による取組内容

（1）ウニの密度管理と母藻施設の設置

藻場保全区域に侵入するウニを採捕し、母藻施設区域に移植する取組を実施している。

ウニを採捕する場所は調査会社が長年蓄積した知見をもとに選定している。保全区域へのウニの進入口を推定して、その進入口を重点的に対策する。



母藻施設は延縄式で、基本的には上下ともにコンブを用いるが、下段にはアラメを混ぜることもある。また、アンカーとして用いている部材を岩盤清掃することで、海藻の着底基質を創出している。

（2）教育活動

地元の子育て支援団体から依頼を受け、漁業体験を地元の子供に提供している。体験内容は、①カゴ漁体験、②ウニ駆除見学、③座学・ワークショップである。

連携の効果と今後の方針

外部の知見が触れ合って、「今まで普通と思っていたことが、普通ではない」と認識できるようになった。また、他の浜の漁業者が参加することで、漁業の技術交流がなされており、本事業の大きな成果であると感じている。

連携体制の構築により、技術提供者を巻き込んだ取組ができることから、藻場保全効果を発現することに関しては強い自負を持っている。一方で、外部交流の促進・拡大、他地域への成果の落とし込み、環境変動への対応が今後の課題であると考えている。